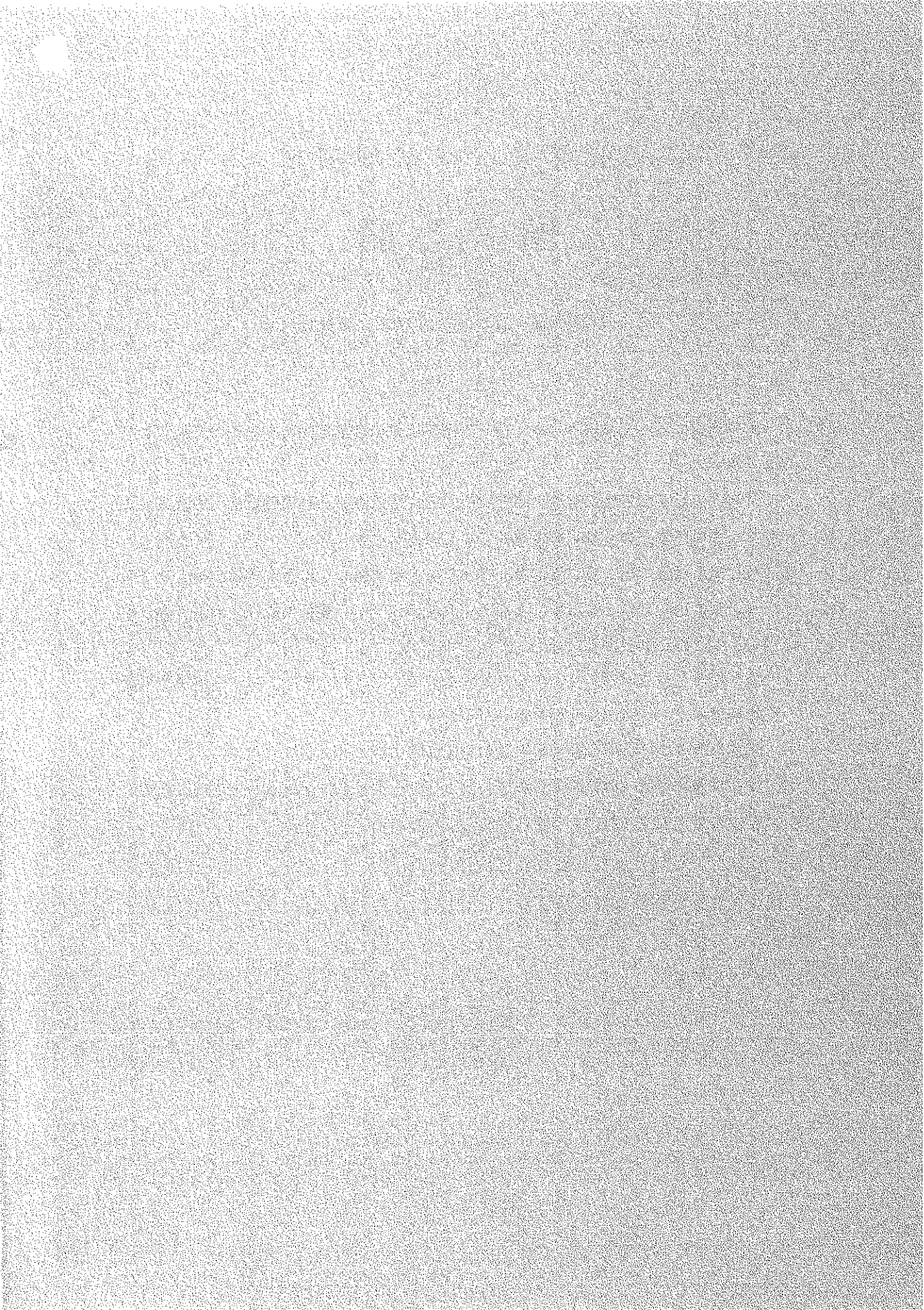


# 2018 年度 入学 試験 問題

## 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。



— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(45点)

(1) 科学はこれまで、政治的に中立な分野と考えられてきた。主観的なリスク認知は大げさになりがちだし、人によって異なる価値観も混入してしまう。だからこそ、物質に還元し定量化する科学的な分析を行うことで、リスクを公正中立に評価しようとしてきたのだろう。放射線被ばくの健康リスクは、「一つの事象の確率と重大さとの積」として定量化される。具体的には、被ばく量に依じて特定の疾患の発生率が増加するかどうかを統計学的に検定する。

生命現象を、被ばく量、疾患の発生率という物質に還元し、因果的、数学的に定量化して捉える見方は、機械論的自然観と呼ばれる。一七世紀の哲学者で数学者でもあるデカルトが提唱したこの機械論的自然観は、ヨーロッパ近代科学の特質となったとされるが、科学史家の伊東俊太郎によれば、ギリシアにも、中国にも、イスラムにも、そして日本にもない非常に西欧的な特殊な思想なのだという。

(2) 自然を死せる機械として見ようとする機械論的自然観は、人間の身体を量と大きさだけを持ち、意識もなく機械的に動く物質のカタマリと見なす。身体を機械と見なすことで、故障の原因を突き止めるために機械を分解するように、身体をバラバラに分解して生命現象を説明しようとする発想が生まれる。個体から臓器へ、臓器から細胞へ、そして分子レベルでの変化である電離放射線による水分子のイオン化、フリーラジカルの発生、水素結合の破壊、DNAの二本鎖切断と、物質に還元し、因果的に確率として生命現象を定量化しようとする。

原発事故の健康リスクは、物質に還元することで、医療被ばくや喫煙によるがん死亡リスクと「分かりやすく」比較できるようになる。その代わり、社会の病は評価の対象外となり、実害があることが「分かりにくく」なってしまう。

一方、「私」の本質ないし本性は、考えるということだけにあつて、存在することにどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない一つの実体、すなわち、「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する(ワレ<sup>わが</sup>惟<sup>ただ</sup>ウ、故ニワレ<sup>わが</sup>在<sup>あ</sup>リ)」(デカルト)となる。そして、いかなる物質的なものにも依存しない人間の理性は、機械のように自然を道具として扱い、神のごとく支

配しようとする。近代科学がアンモク<sup>(3)</sup>の前提としているのは、理性の力によって、自然を制御可能なものと見なすこのような機械論的な自然観である。その最たるものが原子力であろう。

しかし、このような自然観は、庶民感覚とは大きくズレているのではないだろうか。台風や地震、津波などの自然災害は制御不可能で、自然は恐れ多いものと感じるのが、多くの一般庶民の自然観であろう。

今日の科学技術の前提となっている自然観がいかに特殊かは、異なる自然の概念を比較すればはつきりするだろう。哲学者の木田元は、二つの自然の概念を検討している。

一つは、外的物質的存在を意味する自然。現在の自然科学が研究対象とするのは、この概念の自然だ。日本では、明治二〇年代に森鷗外<sup>(4)</sup>がこの意味で nature の訳語に当ててから広がったそうだ。この意味だと人間は、精神的存在者や社会的存在者と区別される有機体としてのヒトとして扱われる。自然は、精神と自然、社会と自然、文明と自然という対概念のなかで捉えられる。対概念のなかで考えられている自然は、対になっていてもう一方の項に含まれている存在者と区別され、それと対立するような存在者の特定領域を指す、と木田は指摘する。

もう一つは、「そう考えるのが自然だね」という意味の自然。事物一般のあるべきあり方を意味する自然だ。木田によれば、日本語でも人為の加わらない自<sup>(5)</sup>から然<sup>(6)</sup>ある状態という意味のほうが、古く基本的なのだという。『広辞苑』(第五版)には、「おのずからなる生成・展開を惹起<sup>(7)</sup>させる本具の力としての、ものの性。本性。本質」とある。英語の nature にも似た意味があり、nature of history は「歴史の自然」ではなく「歴史の本性」と訳される。このような意味は、nature の基になっているラテン語の natura (ナートゥーラ)、そのさらに基になっているギリシア語の *physis* (ピュシス) にも一貫して認められるという。この意味だと、(4)。「自然の主人にして所有者」(デカルト)ではなくなる。

では、西欧の新薬の副作用を恐れる患者に向かって、「みなさんは人工的なものを危ないと思い、天然由来成分を安全と誤ってしてしまう。身体への作用は、どちらも同じです」と語る医者<sup>(8)</sup>の自然観は、どうだろうか。医者は人間の身体を外的物質的存在と見なしている。そして、人間の理性は、(5)薬の副作用を物質に還元することで理解し、制御できると考えているから、デカルトの

機械論的な自然観を前提にしていると言える。

一方、新薬の副作用を恐れ、漢方薬や民間療法に頼る患者は、自から然ある状態を自然と捉え、身体の内側から生まれいずる本来あるべき自然治癒力に期待を寄せているのではないだろうか。そのような自然観を持つ人は、人間の都合で自然を制御し、支配しようとする発想そのものに抵抗を感じ、副作用をより恐ろしく感じることだろう。

自然観の違いは気持ちの問題にとどまらず、健康リスクにもかかわってくる。新薬は、短期的には劇的な効果があるかもしれない。しかし、二〇〇三〇年後には薬漬けになり、副作用で命がオビヤカ(6)されているかもしれない。一方、食生活の改善などで自然治癒力が高まれば、短期的には目立った効果はなくても、長い目で見れば、薬に頼らないで生活の質を高めることができるようになっていくかもしれない。どちらの自然観が、より優れているとは言えない。新薬の副作用に対する患者と医師の感じ方の違いに、西欧近代科学の前提となっている機械論的自然観の特殊性がよく現れている。

日本人の自然に対する考え方は、水俣病など四大公害病が社会問題化した一九六〇〜七〇年代を境に大きく変化した。

「人間が幸福になるためには、自然を征服してゆかなければならない」と考えている人は六〇年代には約三〇%いたが、七〇年代以降激変、八〇年代後半に一〇%を切り、二〇一三年は六%に過ぎなかった。一方、「人間が幸福になるためには、自然に従わなければならない」と考えている人は六〇年代には二〇%弱だったが、九〇年代以降は半数の人が「自然に従う」と答えている。また、「世の中は、だんだん科学や技術が発達して、便利になってくるが、それにつれて人間らしさがなくなっていく」と考える人も、五〇年代の三〇%台から年々増加、九〇年代以降は半数以上の人が、科学技術の発達で人間らしさがなくなっていくと考えている。

これらの結果は、科学技術の発達の大前提となっている自然観、すなわち、道具として自然を利用しようとする機械論的自然観に対して、違和感を感じる日本人が増えていることを示している。

近代以降、機械論的自然観に基づいて科学技術が発展するにつれ、自然は支配者である人間の資源として、都合のいいように利用されるようになった。社会学者のベックが指摘するように、自然は人為化され、社会化された。自然を社会化し、自分たち

に都合のいいように利用しているのだから、結果として被害が出た場合、過失責任が問われる者は、被害者および破壊された環境に対して自然災害以上に厳しい政治的・社会的・経済的・倫理的責任が問われるはずである。

自然が社会化されることで放射線の健康リスクには社会の病が上乘せされている。ところが、従来の自然科学的手法では、格差や孤立感、不公平など質の違いとして現れる社会の病を評価することは困難だ。物質に還元する過程で、あらゆる質がはぎ取られてしまうからだ。

赤色の温かみといった質感、不安や恐れ、痛みに伴う不快感や不公平さに対する怒りなどのジョウドウ<sup>(7)</sup>、そして正義や倫理など、物質に還元し定量化することが困難な一切の質は、リスク評価の対象から外されてしまう。

残るのは、形、大きさ、広がり、運動だけを持つ分割可能な微粒子の集合だ。物質に還元する科学は中立的で客観的といえは聞こえがいいが、切り捨てられてしまう事項が健康リスクに関わる場合、リスクは過小評価されることになる。逆に責任が問われる側は、科学の言葉を自らの過失の隠れ蓑<sup>(8)</sup>に利用できる。

一例を挙げよう。同じ放射線被ばくでも、人は原発事故による被ばくのほうが医療被ばくより、「破滅的で、ひどく恐ろしい」と感じるとされる。そして、受け身のほうが、自分の意志で受け入れた場合より一〇〇〇倍リスクを大きく感じると言われる。これらの研究を根拠に、客観的なリスク推定値に比べ、被災者は「過度な」不安を抱きがちだと解釈されることが多い。

しかし、職場環境に関する研究から、自分の仕事を自分で決める権限を持たないと、心筋梗塞のリスクが高くなることが明らかになっている。このことは、自己決定権がないこと自体、健康リスクになることを示している。受け身のほうがリスクを大きく感じるのは、実際に健康リスクが高まるからだろう。

原発事故由来の被ばくを医療被ばくと比較する科学者は、健康リスクを被ばく量に還元することで客観化し、自分を政治的に中立な立場に置いているようにでいて、質の違いを無視し、(9)から目をそらしている。本人の意図がどうであれ、結果的に過失責任が問われる国と東京電力をヨウゴ<sup>(10)</sup>することになる。彼らが被災地で「エア御用学者」と揶揄<sup>や</sup>される所以<sup>ゆゑ</sup>だ。

(伊藤浩志『復興ストレス』による)

注 デカルト……フランスの哲学者・数学者（一五九六～一六五〇）。

〔問一〕 傍線(2)(3)(6)(7)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人間は自然の友人ということになり、自然とは相補関係にある
- B 人間は自然の一部ということになり、自然とは対立しなくなる
- C 人間は自然に従うということになり、自然とは主従関係にある
- D 人間は自然に依存することになり、自然とは協調することになる
- E 人間は自然と調和することになり、自然とは共働するものとなる

〔問三〕 傍線(5)「人間の理性は、薬の副作用を物質に還元することで理解し、制御できる」とあるが、具体的にはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人間の理性は、新薬の副作用に対する恐れを、日常生活上問題が生じないと信じさせることで抑制できると考えること。
- B 人間の理性は、新薬の副作用に対する恐れを、漢方薬も人工的なものと理解させることで抑制できると考えること。
- C 人間の理性は、新薬の副作用に対する恐れを、自然の摂理には抗えないと認識させることで抑制できると考えること。
- D 人間の理性は、新薬の副作用に対する恐れを、薬の適当な効果を統計学的に提示することで抑制できると考えること。
- E 人間の理性は、新薬の副作用に対する恐れを、非科学的なものにすぎないと説得することで抑制できると考えること。

〔問四〕 傍線(8)「科学の言葉を自らの過失の隠れ蓑に利用できる」とあるが、その例としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 被災者が「過度な」不安を抱くことで、放射線被ばくに対するリスクは一〇〇〇倍高くなることが証明されていると主張する。

B 健康に関して多少の犠牲を払うのは、人間がこれまで原子力による恩恵にあずかってきた以上、やむを得ないことだと主張する。

C 公害病によって何らかの被害が生じた場合でも、人間が自然を社会化することで工業発展を遂げたのだから、当然の結果だと主張する。

D 職場で自己決定権があれば健康リスクが減少すると証明されているので、自己決定権を与えられている人が病気になるのは本人の責任だと主張する。

E 原発事故の被ばくに関わる健康リスクは、医療被ばくや喫煙によるがん死亡リスクと比較すれば、問題にならないほど低いと主張する。

〔問五〕 空欄(9)に入れるのにもっとも適当な四字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。



〔問六〕 傍線(1)「科学はこれまで、政治的に中立な分野と考えられてきた」とあるが、この見解に対する筆者の考えを説明する

ものとして、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 科学は自然を数量的な物質に還元することで数学的に処理することを可能にしたので、国や企業はそれらを政治的主張の根拠にして、政治責任を果たすことができた。

B 科学は現象を因果的および数学的に定量化して捉えることができたので、人間の行為の因果関係も客観的に捉えられるようになり、異なる政治的価値観に抗える力を持つ。

C 科学は自然を死せる機械として見ようとしますが、それ自体に主観的で恣意的な意見が反映されることはないため、そこに偏った政治的主張が反映されることもない。

D 科学は機械論的自然観に基づいて客観的判断を下すことができると思われがちだが、そのような自然観からはみ出るものを無視することで、特定の政治的立場を利用することもある。

E 科学は特定の疾患の発生率を統計学的に検定してきたので、数量化されない健康リスクを考慮すれば、かえって政治的中立性が保証されなくなる。

〔問七〕 本文の趣旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 近代科学はデカルトの機械論的自然観が根底にあったので、今日のようなめざましい発展を遂げたが、人間を含む自然を機械に還元して分析することで価値判断しているといえる。

B 人間の身体を外的物質的存在と見なす科学は、定量化できることを前提としているので、何か被害が生じてでも定量化できないものは自然科学的リスク論から排除されることになる。

C 人間は自然を都合よく利用してきたが、ありのままの自然に手を加えることがそもそも人工的、社会的行為であるから、漢方薬や民間療法もまた、自然を制御可能なものと見なす行為である。

D 心の病が現実の病を引き起こすとすれば、たとえそこに明確な因果関係を証明できなくても、物質に還元することが困難なリスクにも注意を向けて、治療法を確立していくべきである。

E 生命現象を定量化して実体のあるものとして捉えることは、研究の客観性を高める行為として推奨されるものだが、同じように正義や倫理も定量化することで客観性をはかることが可能になる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

探偵小説では誰もが語る。容疑者はアリバイを主張し、目撃者は見たもの、聞いたことを述べる。犯人は虚偽の証言をして、自分の容疑をほかにそらそうとする。探偵は自分の推理の結果を語り、犯人を指摘する。誰も語るもののない探偵小説など想像することはできない。探偵小説の物語それ自体が、ある語り手によって語られていることが多いのである。探偵小説というものはかくのごとく、さまざまな言葉のより合わせによって作り上げられている。

そのような言葉をここでは〈言説〉と呼ぼう。話された言葉か書かれた言葉かは問わず、たんに日常的な挨拶のやりとりにとどまることなく、なにかを報告したり、証明したり、論証したりする言葉のことである。そして探偵小説では、事物もまた言葉の代わりになる。つまり物的証拠がそれだ。探偵も犯人もこの証拠が言葉以上に雄弁であることを知っている。それはたんなる比喩ではない。その事物もなにかを証明しているとすれば、やはり言説になりうるのである。したがって、探偵小説はなによりもまず言説の世界であるといわねばならない。

この言説は探偵小説ではどこに向かつてなされているのか。いうまでもなく、事件の真相に向かつてである。探偵小説の本質はどこにあるかという点に関して、異論がいくつも立てられるにしても、ロナルド・ノックスのいうごとく、「物語の開始に先立って、事件がすでに完結しているところにある」ことではおおかたの賛同がえられよう。探偵小説では、すでに完結したこの事件の解明が語られるのである。最近の物語分析でも、このような見方をほぼ引き継いでいる。もちろん、はるかに精緻な仕掛けを駆使してはいるが。言い換えれば、事件の真相をなす物語とそれを解明する物語の二重性が探偵小説の本質なのである。

フランスのある研究者は、前者を「謎として解明されるべき、隠された物語」の意味で「クリプトレシ」と、後者を「表面に表われた物語、読者が読み取る物語」の意味で「ファネロレシ」と名付けている。そして探偵小説の面白さはこの二つの物語の絡み合いあるいは組み合わせの妙にあるといっても過言ではない。もちろんクリプトレシの謎が深ければそれにこしたことはないが、巧みなファネロレシの提示によって、小説それ自体の興味がいつそう高まることはいうまでもあるまい。都筑道夫は犯人

の仕組むトリック不要説を述べている。トリックはなくとも（解明の）ロジックが充分に興味深ければそれで探偵小説は成立する、というのがかれの主張である。

この点を物語分析の側から考えてみよう。物語分析では、物語をやはり二つの面に分ける。ひとつは物語の〈筋〉、〈話〉であり、いまひとつはその筋を物語へとまとめあげる〈語り〉である。〈筋〉は、一連の出来事の時間の順序による配列とみなすことができ、（1）である。〈語り〉は、受け手（読者、聞き手）にそれらの出来事を伝える順序を示している。

一見同じように不可解な状況で発見された事件も （1） における筋が入り組んでいることもあれば、きわめて単純な筋に、偶然が作用した （2） をもつものもある、ということが出来る。ディクソン・カーの『テニス・コート殺人』では、被害者の足跡しかない、ぬかるんだテニス・コートの中真ん中に他殺死体が発見される。都筑道夫の『冷蔵庫の死体』は、大型の冷蔵庫のなかに死体が発見され、被害者の靴と上着が見当たらない、というところから始まる。前者は物語的に不可能と思われる状況であり、後者はむしろ心理的に理解しえない状況だといふ違いはあるが、カーは、犯人のトリック、すなわち不可能を可能にする過程に工夫をこらし、都筑道夫の方はそのような異様なかたちで死体を遺棄するにいたった理由を探る過程がその小説の面白さになっている。

探偵小説におけるクリプトレシとファネロレシの絡み合いをいまずこし詳細に検討してみよう。物語は〈話の筋〉の最初から始まるとは限らない。物語はそれが語ろうとする事実が終わった時点から遡ることなど珍しくはない。探偵小説の二つの物語についても、（3） は （4） のなかに細切れになって、散りばめられているのが普通である。それにもいろいろな段階があつて、クリプトレシが探偵の解明の中にはほとんど姿を現さないこともある。つまりクリプトレシとファネロレシの干渉がほとんどゼロといえる場合である。フランスの作家ガポリオの『ルコック探偵』では、最初クリプトレシは、全く隠されていて、探偵によって犯人がつきとめられたあと、あたかも独立した物語のごとくクリプトレシが語られる。これは、当時の新聞小説に特有の型にならった初期の探偵小説によくみられる形式であるといわれ、コナン・ドイルの『四つの署名』にも踏襲されている。けれども、おおかたの探偵小説は、探偵の追求とともに事件の真相が明らかにされる。ファネロレシの展開はクリプトレシを

(再) 構成することになる。

ここには物語分析の根本問題があるように思われる。それは再についた括弧を取り去ることは可能かという問いに変形することができよう。物語とはどのようなものか、いま一度ふり返って見よう。前述のように物語は、話の〈筋〉と〈語り〉の二つの側面から成り立っている。そこから、物語は、実際にあつた、というよりもあつたと想定されている事柄——それが話の筋というわけだ——を語るものとみなされがちである。つまり物語はなにかある事実を再現しようとする言説(端的に「現実的言説」と呼んでおこう)のひとつに分類されている。それはそのとおりである。しかし物語の受け手(読者、聞き手)はその話をどのようにして知るのか。送り手(作者、語り手)が「語る」その順序に従って知ってゆくほかない。そして受け手はそこで語られる事実をなにかに照らして受け入れたり、拒んだりすることになる。そうであるとすれば、物語はむしろ、送り手が事柄を一つひとつ提示しながら構築してゆくものとみなされなければならない。したがって物語は必ずしも事実(として想定されているもの)を語るのではなく、また事実と照合してそれが真か偽かを判定する必要もないということになる。つまり、物語では受け手が送り手の〈話〉をそのまま受け入れることが重要なのである。物語は、ある事実の立証ないし再現を狙うというよりも、むしろ (5) の領域に属している、といわねばならない。

(6) したがって、探偵小説においてクリプトレシは、ファネロレシによって再構成されるのではなく、(再)構成される、つまりあの再につけた括弧は取り去らずに、いくぶんかの留保のニュアンスを残しておく必要がある。ファネロレシの機能が事件の真相を暴くことにあるとしても、この真相の暴露は、読者に対して事件の存在を説得することによって行われるであろう。ハリイ・ケメルマンの傑作『九マイルは遠すぎる』は、まさにこの議論にうつつけの小品である。このシリーズで探偵役を務めるニッキイ・ウエルトは、友人に「九マイルもの道を歩くのは容易じゃない、ましてや雨の中となるとなおさらだ」という一文からどのような推論が可能であるかを示すはめに陥る。そこでいくつもの限定や条件を加えながら推論を展開していった、結局「給水のために停車中の夜行列車での殺人」という犯罪に到達する。ここで重要なのは、友人がニッキイの推論に説得されて、その事件の存在を確信するということなのだ。この短篇では、問題の一文をレストランの入口で小耳にはさんだという形で、現

実との接点はもちろん設けられてはいるが、しかしこの事件は、あくまでもニッキイの推論によつて構築されてゆくのであり、手がかりをもとに組み立てられるのではない。地名がうかび、列車やバスの運行が論じられるのは、彼の推論の過程においてなのである。

ところで、このような説得の効果を議論する学問は、西欧では従来レトリックと呼ばれてきた。重要なのは、この真偽そのものではなくて、真実に近づくこと、真実の印象を与えることであり、その印象は語り方が巧みであるほど強く与えられる。レトリックにおいては、ある事柄が〈事実かどうか〉よりも、〈いかにありそうだ〉ということのほうが重視されるのだ。言い換えれば、相手を説得するには、それが真実であるかどうかは問題ではなく、真実らしいという条件を充たしていればよい、といえる。ジュリア・クリステヴァもこの真実らしさを論じて、真実らしさは言語の外にある事象（現実、事実）との関係を棚上げにしているのであるから、その特徴は、ただ「なにかをいわんとする」こと、つまり意味をもつということしかない、と述べる。彼女は、「意味があるということは、真実らしいということであり、真実らしいということは意味があるということである」と端的にいい切っている。

探偵小説は、このようなレトリックの領域にあるのだから、探偵小説を送り手が受け手に自分の物語を受け入れさせようとす  
る争いと考えることができる。とすれば写実主義的な捉え方によつて、それを現実との一致という観点からのみ論じる必要はす  
こしもない。むしろ問題は、(7) はいかなるものであるかという先に宙吊りのままに残した問いに答えることである。い  
ま、それに答えることができる。それは「真実らしさ」、「本当らしさ」、すなわち〈意味〉の有無にほかならない。換言すれば、  
ある物語に意味がありさえすれば、ひとはその物語を受け入れることができるのである。つまり探偵小説とは〈意味をめぐる争  
い〉にほかならない。

（山路龍天・松島征・原田邦夫『物語の迷宮』による）

注 ロナルド・ノックス……英国の聖職者・探偵小説作家（一八八八～一九五七）。

ジュリア・クリステヴァ……ブルガリア出身のフランスの哲学者・文学理論家（一九四一～）。

〔問一〕 空欄(1)～(4)に入れる用語の組み合わせとしてもっとも適当なものはどれか、左の組み合わせの中から選び、符号で答えなさい。

A	(1)	クリプトレシ	(2)	ファネロレシ	(3)	クリプトレシ	(4)	ファネロレシ
B	(1)	クリプトレシ	(2)	クリプトレシ	(3)	ファネロレシ	(4)	クリプトレシ
C	(1)	ファネロレシ	(2)	ファネロレシ	(3)	クリプトレシ	(4)	ファネロレシ
D	(1)	ファネロレシ	(2)	ファネロレシ	(3)	ファネロレシ	(4)	クリプトレシ
E	(1)	クリプトレシ	(2)	クリプトレシ	(3)	クリプトレシ	(4)	ファネロレシ

〔問二〕 空欄(5)に入れるのにもっとも適当な漢字二字の語句を、本文中から探し出して答えなさい。

〔問三〕 傍線(6)について、なぜ「あの再につけた括弧は取り去らずにおいて、いくぶんかの留保のニュアンスを残しておく必要がある」のか、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 現実の手がかりを用いた事件の再現だけでは、真相に到達することができないから。
- B 事件の真相の解明とは、ある事実を再現しようとする言説のひとつに過ぎないから。
- C 物語の受け手は、事件を巡る再現的言説によって真偽を判定するとは限らないから。
- D 手がかりだけを用いて構成される解明こそが、事件を真に再現するものであるから。
- E 事件の再現は、真相についてのひとつの解釈などではなく真相そのものであるから。

〔問四〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 探偵小説の受け手が物語を事実と一致させるための基準
- B 探偵小説の受け手が現実を受け入れるか拒否するかの基準
- C 探偵小説の受け手が、物語が真か偽か判定するための基準
- D 探偵小説の受け手が物語を受け入れ、また拒むときの基準
- E 探偵小説の受け手が真実の物語を受け入れるか否かの基準

〔問五〕 次のア～オのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A 探偵小説では、物的証拠が言説としていくら雄弁でも、言葉による証言や主張の方が事件の論証に適している。
- I 物語の送り手は、受け手に対して、つねに直線的な時間の流れに沿った順序で事柄を提示して語る訳ではない。
- ウ 『四つの署名』は、語り手による物語が展開するに従って真相が徐々に明らかになってゆく形式の作品である。
- エ 『九マイルは遠すぎる』での探偵による推論は、この作品中の犯罪事件の真実と必ずしも一致する必要はない。
- オ 推論による説得においては、言語の外にある事実との関係内で真実を語るという条件が充たされねばならない。



三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

新待賢門院に、伊賀の局といふありけり。これは左中将義貞朝臣の侍に、篠塚伊賀守といへるが女になんありける。女院の御所は、皇居の西の方にて、山に続ける所なりけり。去ぬる正平丁亥の年の春のころ、ばけ物あなりとて、人々さわぎ恐れ給へり。形をしかと見定めたる者もあらず。行きあひける者は、心地あしくなりにけり。内裏より御宿直人あまた参らせ給ひて、<sup>(1)</sup> 藪目など射させれば、そのほどは静まりにけり。水無月の十日あまりの程、いとあつき頃なりければ、この局、庭に出で立ち給へるに、月のさし出でていとあかければ、

<sup>(2)</sup> 涼しさをまつ吹く風にわすられて袂にやどす夜半の月かけ

と誰聞く人もあらしと、ひとりごち給へるに、松の梢のかたよりからびたる声して、

ただよく心しづかなれば、すなはち身もすずし

といふ古き詩の下句をいふに、見あげ給へば、さながら鬼のかたちにて、<sup>(3)</sup> 翅の生ひ出でたるが、眼は月よりも光りわたるに、たけきもののふの心も消えうせぬべきに、うち笑ひ給うて、「まことにさにこそありけれ。」<sup>(4)</sup> さもあらばあれ、いかなるものにかあるらん。あやしく覚ゆるにこそ、名のりし給へ」と問はれて、「われは藤原基任にこそ侍れ。女院の御為に命を奉りさぶらひしに、せめてはなきあととはせ給はんことにこそあれ、それさへなく候へばいと罪ふかく、かかる形になりて、くるしきこと<sup>(5)</sup> のいやまされば、うらみ奉らんと思ひて、この春の頃よりうしろの山に候へども、御前にはおそれ参らぬにこそあれ。この由申し賜はなん」と答へければ、「げにさは聞き及びし。されどうらみ奉るべきことかは。世のみだれにおもひすぐし給へるぞかし。そのことわりならば、申して申ひてん。さるにても御経にはいかなる事かよかるべき。心にまかせ侍らん」と宣へば、「ただその事ばかりに候へ。御申ひには法華経にしくはあらじ。されば帰りなん」といふに、「帰らん処はいづくにか」と宣へば、「露と消えにし野原にこそ、なき魂はうかれ候へ」とて、北を指して光りもて行くを見送りて後、女院の御前に参りて申し給ひければ、「まことに思ひ忘れてこそ過ごしつれ」とて、あけの日、吉水法印に仰せごとありて、御堂にて三七日法華経を供

養し給ひければ、その後はあへて異なることもなかりき。うかびてやありつらん。いとたのもし。

(『吉野拾遺』による)

注 新待賢門院……藤原廉子。 伊賀の局……篠塚重広の娘。 正平丁亥の年……正平二年。西暦一三四七年。

暮目……大形の鏑かぶらをつけた矢。音が鳴り除霊の効果があると考えられた。 からびたる声……しゃがれ声。

古き詩の下句……『和漢朗詠集』の「納涼」にある句。 藤原基任……高師直こうのちのらの狼藉ろうぜきから新待賢門院を守るときに討

ち死にした。 三七日……二十一日間。

〔問一〕 傍線(1)「参らせ」を文法的に説明したものととして、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 謙讓の動詞「参る」の未然形＋使役の助動詞「す」の連用形
- B 謙讓の動詞「参る」の未然形＋尊敬の助動詞「す」の連用形
- C 尊敬の動詞「参る」の未然形＋使役の助動詞「す」の連用形
- D 尊敬の動詞「参る」の未然形＋尊敬の助動詞「す」の連用形

〔問二〕 傍線(2)「涼しさをまつ吹く風にわすられて袂にやどす夜半の月かげ」の和歌の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 二句切れである
- B 初句は枕詞である
- C 掛詞が使われている
- D 折り句が使われている
- E 二句目までが序詞である

〔問三〕 傍線(3)「たけきもののふの心」とは、ある作品の表現を意識した言葉である。その表現がある作品の箇所として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 竹取物語の冒頭
- B 伊勢物語の初段
- C 古今集の仮名序
- D 枕草子の第一段
- E 徒然草の序文

〔問四〕 傍線(4)(5)(6)の語句の解釈として、もっとも適當なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(4) 「なもあらばあれ」

- A それはどこかにあったが
- B 本當に正しくそうであるが
- C それはそれとして構わないが
- D そうならばそうあつて欲しいが

(5) 「いやまされば」

- A 逆に勝つて来るので
- B ますます多くなるので
- C 非常に多くなつたならば
- D 不本意にも勝つて来るので

(6) 「しくはあらじ」

- A 及ぶ物はあるまい
- B 行き渡つてはいまい
- C 敷き広げてはいけない
- D こだわることはあるまい

〔問五〕 傍線(7)「思ひ忘れてこそ過ごしつれ」とあるが、誰がどんなことを忘れていたのか。もつとも適當なものを左の中から  
選び、符号で答えなさい。

- A 基任が、自分が成仏するにはどんな手段があるのかを忘れていた。
- B 基任が、自分の供養を請わなければならぬことを忘れていた。
- C 女院が、基任の供養をしなければならぬことを忘れていた。
- D 伊賀の局が、基任がどんな経緯で死んだのかを忘れていた。
- E 伊賀の局が、基任を供養するための段取りを忘れていた。

〔問六〕 次のア～オのうち、本文の内容に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A 伊賀の局は、亡霊となった基任の容姿を女院に詳しく報告して、彼が望んだお経によつて成仏させた。
- I 伊賀の局は、基任が詠じた句で彼が成仏していないことを悟つて、その句意を踏まえてお経を読んだ。
- ウ 伊賀の局は、基任の亡霊に対して動じることなく語り、彼の要望を受けて供養の段取りをつけた。
- E 伊賀の局は、基任の要望どおり亡くなった場所で法要を執り行い、女院への崇たりをなんとか回避した。
- オ 伊賀の局は、基任の記憶を蘇よみがえらせるような和歌を詠んで、その歌の力だけで彼を極楽浄土へ導いた。





